

備前の瓦窯

岡 本 芳 明

一 論 文 要 旨 一

備前地域は、古来より「焼きもの」が盛んな地域で、中国・四国地方最大の須恵器窯跡群である邑久古窯跡群がある。この地で生産された須恵器は、備前国の調（中央への物納の租税）として都へ納められたと考えられており、平安時代末には備前焼へ発展する。また、鎌倉時代初期に東大寺再建瓦を焼成した国史跡万富東大寺瓦窯跡は、磐梨古窯跡群の一角に含まれる。

備前地域には、30数か所の瓦窯が確認されるが、発掘調査が行われている事例は少ない。今回は、構造的特徴が判明している備前地域の瓦窯を紹介するとともに、備中などの事例と対比しながら、備前地域の瓦窯の構造変遷を検討した。

備前の寺院と瓦窯の関係が判明（推定も含む）しているものを選定し、万富東大寺瓦窯跡など寺院までの距離が離れている瓦窯があるが、多くは寺域内か少し離れたところに瓦窯があり、やや離れてある瓦窯のほとんどが須恵器窯跡群の中に築かれていることを確認した。

備前での瓦窯導入期は、服部廃寺の生砂池窯跡のような、古来からの須恵器窯の技術を利用した無階窖窯であったようである。この形態は不老山東口窯跡のように室町時代後半にもみられる。瓦専業窯の有階窖窯の技術は備前では確認されていない。

有牀式平窯は、8世紀の国分寺造営に伴い全国的に普及していくとみられている。備中や美作では8世紀代の有牀式平窯がみられるが、備前では平安時代後期の幡多廃寺の瓦窯と遅れている。備前の有牀式平窯は、少なくとも平安時代後期には存在し、鎌倉時代初期にはより効率的に瓦を生産するために小型の有牀式平窯を多く築き、室町時代までは存続していたようである。

1. はじめに

備前を含む岡山県南部は、大きな前方後円墳の分布から吉備国の中枢であり強大な勢力をもっていたこと、その後多くの古代寺院が創建されていることから発展していた地域であることがわかる。吉備を特色づけた技術には、製鉄、製塩、そして窯業がある。

備前地域は、古来より「焼きもの」が盛んな地域で、須恵器窯跡群である呂久古窯跡群、磐梨古窯跡群、児島古窯跡群がある。

呂久古窯跡群は、中国・四国地方最大の須恵器窯跡群で、瀬戸内市（長船町、呂久町、牛窓町）と備前市の南北約10km、東西約8kmの範囲に広がっている。古墳時代中頃から平安時代末期に至るまでの約600年間に築かれた窯跡は約140基が確認されている。まとまった窯群として移動しており、多くの支群で構成されている。長船から呂久の桂山南麓、広高山・高山の周辺地域に窯が築かれ、牛窓町寒風窯跡群周辺と呂久町尻海周辺に広がり、奈良時代には長船町東須恵地域や備前市南部の佐山・亀井戸地域へ移動、長船町北東部をへて平安時代末には熊山山塊周辺・備前市伊部に窯が築かれて備前焼へ発展する（亀田2006）。この地で生産された須恵器は、備前国の調（中央への物納の租税）として都へ納められたと考えられている（『延喜式』巻二四「主計上」）。

また、総国分寺である東大寺の再建瓦を焼成した国史跡万富東大寺瓦窯跡は、吉井川右岸の瀬戸町・熊山町にまたがる丘陵地帯に存在する磐梨古窯跡群の一角に含まれる。

日本の瓦づくりは、6世紀末に本格的な伽藍を備えた寺院である飛鳥寺造営に伴う瓦生産にはじまる。この時に、百済から瓦づくりの技術者が渡来し、瓦の製作技術だけでなく瓦を焼成する窯の築成技術が伝えられた（『日本書紀』崇峻天皇元年（588年）条「瓦博士」）。ただ、百済からの造瓦技術の導入は一様ではなかったようである（亀田2000）。

日本における瓦窯の分類と変遷は、先学の研究（大川1972、森1983など）で整理してまとめられており、さらに、細分した分類や形態変化などが補足・考察されている。

6世紀第4四半期から7世紀第2四半期までの初期瓦窯は無階窖窯であり、有階窖窯の出現は7世紀第3四半期以降で、日本の窖窯瓦窯は無階窖窯から有階窖窯へ変遷する。平窯の初現は、日本の宮殿建築ではじめて瓦が葺かれた藤原宮造営の頃である。藤原宮付属瓦窯の大和日高山瓦窯などで無牀式であったが、操業が天平宝字年間（757～764）の法華寺阿弥陀浄土院所属瓦窯である音如ヶ谷窯跡、平城宮付属瓦窯である大和歌姫瓦窯に有

牀式がみられる。この有牀式平窯は、国分寺の造営に伴い全国的に普及していくようである（高橋2015）。

また、瓦窯窖窯は焼成効率を高めるために平窯化し、無牀式平窯は高温を保つように有牀式平窯へ変化する（毛利光1983）。そして、有牀式平窯は、安価で大量に生産するために小型化してまとまって構築されて、瓦窯の主流となっていった。

備前地域には、30数か所の瓦窯が確認されるが、発掘調査が行われている事例は少ない。今回は、構造的特徴が判明している備前地域の瓦窯を紹介し、すでに報告されている備中の事例（松尾2015）と対比しながら、備前地域の瓦窯の構造変遷を検討していきたい。

2. 備前の瓦窯

（1）奈良時代以前の瓦窯

奈良時代以前の瓦窯は、瀬戸内市長船町の生砂池窯跡（産土池窯跡）、正伝名池窯跡、新池窯跡、奥池中池2号窯跡、備前市の佐山新池窯跡（群）、和気町の飼葉瓦窯跡（漆谷池窯跡）、岡山市の賞田廃寺の瓦窯と上の段窯跡（富原瓦窯跡）がある。佐山新池窯跡（群）以外は、推定も含めて服部廃寺、須恵廃寺、賞田廃寺、富原北廃寺、藤野廃寺と古代寺院に瓦を供給していたと考えられている。

この時期は、各地域に古代寺院や官営施設が造営されており、それに伴う瓦窯や呂久古窯跡群などの須恵器窯跡群から瓦が供給されているようである。

なお、発掘調査が行われているのは、佐山新池窯跡（亀田・白石ほか2014）と賞田廃寺の瓦窯（出宮ほか1971）のみである。

① 服部廃寺の瓦窯

（生砂池窯跡・正伝名池窯跡、新池窯跡）

生砂池窯跡・正伝名池窯跡、新池窯跡は、服部廃寺に供給された瓦専業窯と考えられている。西方約2.6kmに服部廃寺がある。いずれの窯も長船町磯上にあり、これらは一群をなしているが須恵器窯跡群の中ではなく独立したものである。生砂池窯跡と新池窯跡では瓦だけでなく少量の須恵器が採集されている。

服部廃寺は、吉井川東岸の長船平野北部、瀬戸内市長船町服部に位置する。寺域の東が花光寺山古墳のある花光寺山の山裾に隣接し、寺域の南には長船平野が広がる。白鳳時代に創建され、律令期には呂久郡服部郷に属していた。

1992～96年に発掘調査され、金堂や講堂、回廊などの建物跡が確認されて四天王寺式伽藍配置が推測されている。周辺では、朝鮮系の軟質土器が出土しており朝鮮半島との関わりが指摘されている（亀田2001）。創建時

には、中国地方では珍しい川原寺式軒丸瓦（面違鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦）と生砂池窯跡で生産された直立素文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦が使用されていたようである。また、平安時代末の講堂再建瓦は、備前市の伊部南大窯東4号窯跡で同范瓦が出土している（湊・亀田2006）。

生砂池窯跡では、服部廃寺の二A類軒丸瓦と一A類軒平瓦など服部廃寺創建時の瓦のほか、埴や少量の須恵器が採集されている。採集された遺物は、7世紀末から8世紀前半のものである。南西を焚口にして築かれたも

のと推定されている。正伝名池窯跡と新池窯跡は、生砂池窯跡に隣接しており同時期の遺物が採集されている。

② 須恵廃寺の瓦窯（奥池中池窯跡群）

奥池中池窯跡群は、須恵廃寺の南東約400mにある広高山と高山に挟まれた谷部の奥池中池岸にある須恵器窯跡群である。1号窯と2号窯が確認されており、1号窯では6世紀末から7世紀前半の須恵器、2号窯では8世紀代の縄目タタキの平瓦が採集されている。2号窯の縄目タタキ平瓦が須恵廃寺出土の平瓦とよく似ており、創

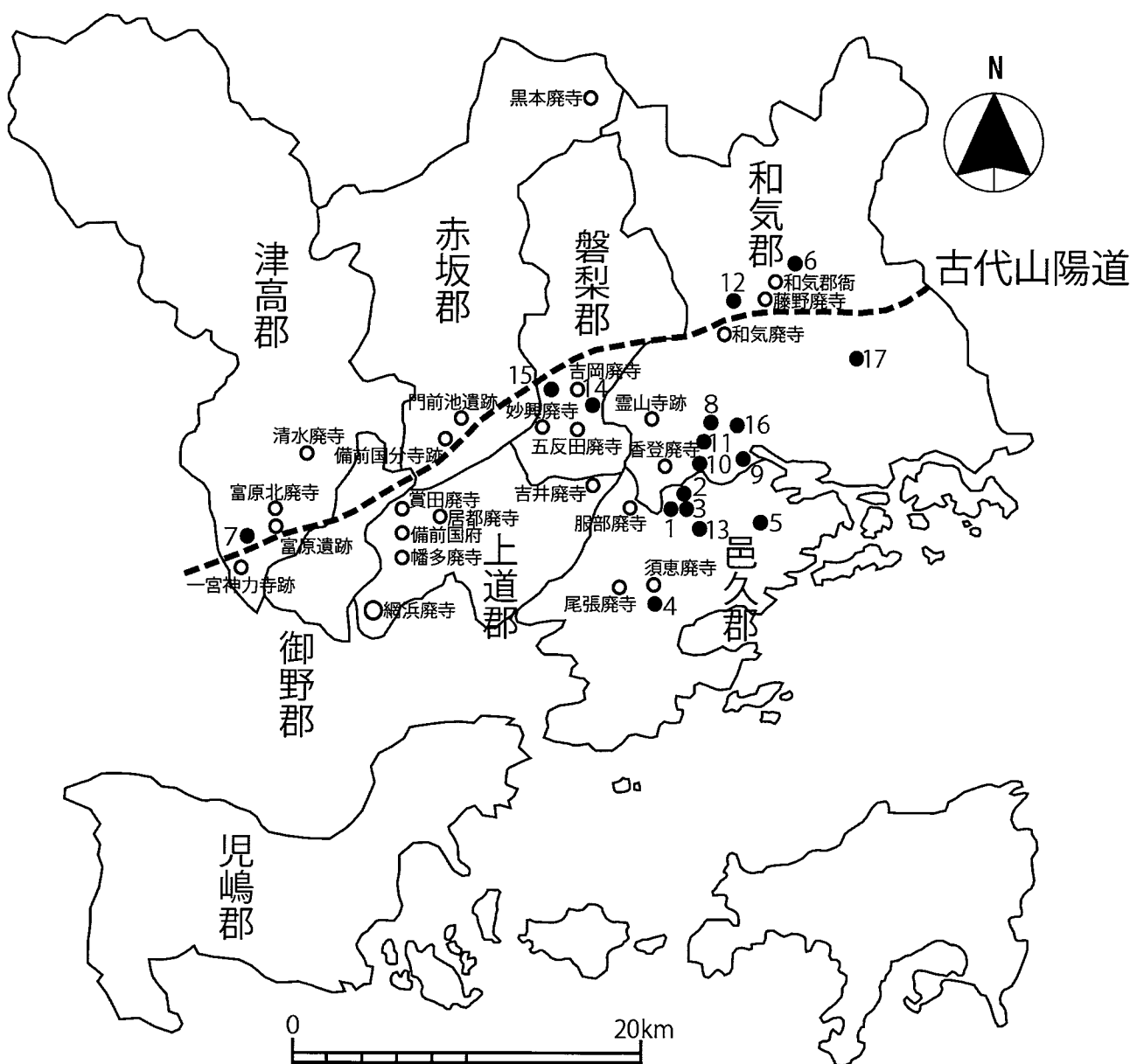


図1 備前国の主な瓦窯

- 1 生砂池窯跡 2 正伝名池窯跡 3 新池窯跡 4 奥池中池2号窯跡 5 佐山新池窯跡 6 飼葉瓦窯跡
7 上の段窯跡 8 大明神窯跡 9 伊部南大窯東4号窯跡 10 大が池南窯跡 11 医王山東麓窯跡群2号窯
12 泉瓦窯跡 13 油杉窯跡群 14 富東大寺瓦窯跡 15 勘定口窯跡 16 不老山東口川間跡 17 閑谷焼窯跡

建時ではないが須恵廃寺の造営に際して、この窯跡周辺で多量の瓦が焼成されたと考えられている。

須恵廃寺は、吉井川東岸の細長い平野部の瀬戸内市長船町西須恵に位置する。東備最古の古代寺院といわれる。白鳳時代に創建され、律令期には邑久郡須恵郷に属していた。1987年に一部が発掘調査され、乱石積基壇や版築基壇をもつ建物跡が確認されている。創建時の軒瓦は、他地域にはみられない古新羅系の瓦を使用しており、朝鮮半島との関わりがみられる。また、7世紀後半から8世紀前半には川原寺式や平城宮式の瓦を使用しているようである。

③ 賞田廃寺の瓦窯 [図2]

賞田廃寺は、旭川東岸の竜の口山系南麓山裾の岡山市中区賞田に位置する。律令期は上道郡上道郷に属し、飛鳥時代に創建された備前最古の古代寺院である。律令期には上道郡上道郷に属し、備前を代表する上道氏と関わる寺院と推測されている。約100m西方に唐人塚古墳があり、南約500m付近に備前国府があったと考えられている。

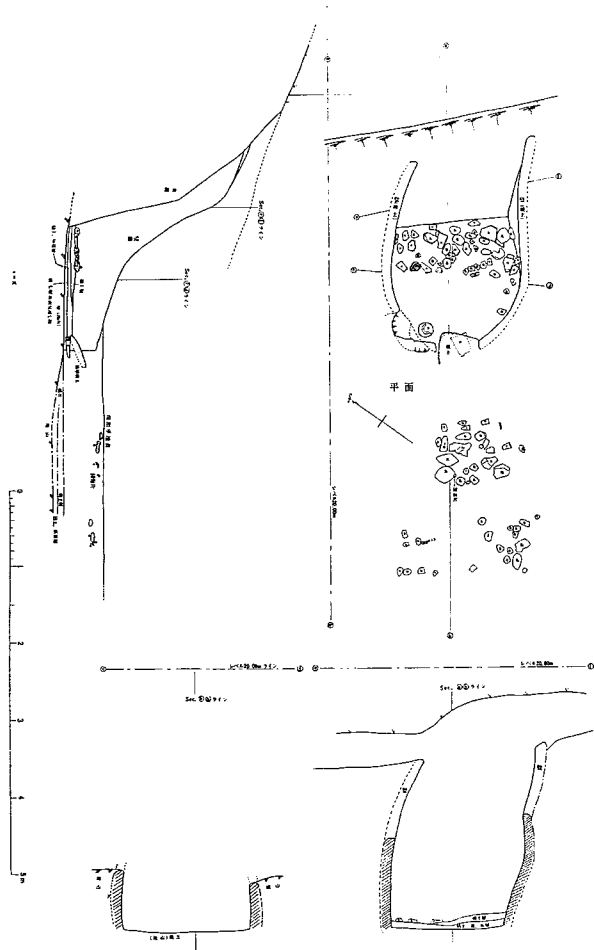


図2 賞田廃寺の瓦窯

1970年の発掘調査時には、檀上積基壇が確認されている。そして、創建時の瓦窯ではないが、8世紀の平城宮6225系軒丸瓦と6663系軒平瓦を焼成した瓦窯跡が寺域の東約20mの山裾で確認されている。部分的な調査であったので全容は明らかでないが、焚口幅約1.1m、燃焼部は最大幅1.65mのほぼ水平な底面、焼成部推定傾斜角は30度前後、ドーム状の天井をもつ窖窯である。平城宮系の軒瓦などの瓦、甕や壺の須恵器を焼成しており瓦陶兼業窯と思われる。奈良時代後半の操業で長期間にわたっては使用されていないようである。

④ 佐山新池窯跡(群) [図3]

佐山新池窯跡(群)は、備前市と瀬戸内市邑久町の境にある四辻山と竜王山の北麓斜面に位置する。邑久窯跡群の実態を把握するための基礎資料を得るために2011年に岡山理科大学によって発掘調査が行われた。窯は、東西軸に長さ約8m、幅約2.6m、床面傾斜角約18度の半地下式窖窯である。少なくとも1度は大きな改修をしているが、出土した土器からは明確な時間差は見られず、8世紀中頃から後半の操業と思われる。持ち込みの可能性があるが窯下方の灰原から平瓦片1点が出土している。

⑤ 上の段窯跡(富原瓦窯跡)

上の段窯跡は、笹瀬川の西岸の岡山市北区富原に位置する。幅約1.5m、残存高約1.5mの急勾配をもつ窖窯で、

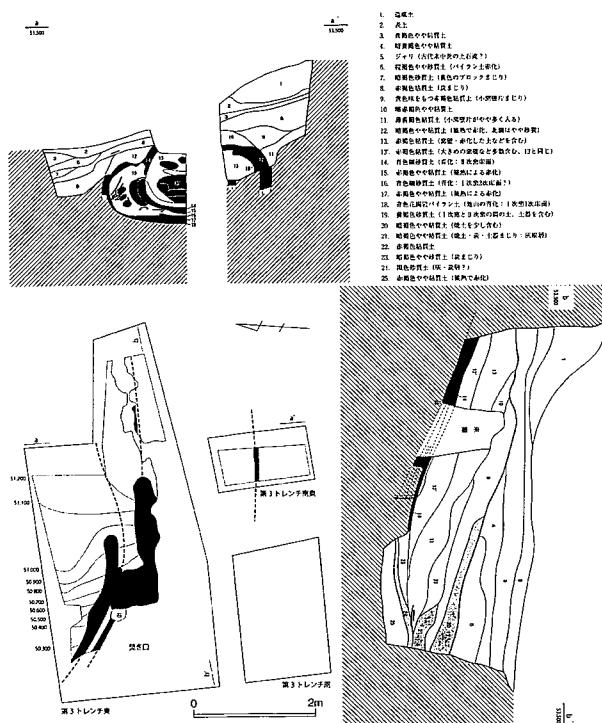


図3 佐山新池1号窯跡

奈良時代の瓦が出土しており、富原北廃寺や津高郡衙または津高駅家に伴う瓦窯であると想定されている。

富原北廃寺は、律令期には津高郡津高郷に属していた。奈良時代から平安時代の瓦が採集されており、平城宮6663系軒平瓦は奈良時代に補修で使用されたようである。南約440mに8世紀前半の平城宮6225系軒丸瓦と6663系軒平瓦が出土する富原遺跡がある。富原遺跡は、津高郡衙または津高駅家と推測され、南側を古代山陽道が東西に貫通する。

(2) 平安時代から鎌倉時代の瓦窯

平安時代から鎌倉時代の瓦窯は、岡山市の幡多廃寺の瓦窯、岡山市東区瀬戸町の国史跡万富東大寺瓦窯をはじめ勘定口窯跡、大谷窯跡、五反田窯跡、妙見山下窯跡、ばかりし窯跡、寺山窯跡、湯の奥窯跡（徳王寺窯跡）、和気町の泉瓦窯跡、田原下峠瓦窯跡、福富窯跡、瀬戸内市長船町の油杉窯跡群（高山3号窯跡？）、瀬戸内市邑久町の福谷湯通窯跡と福谷奥田窯跡、備前市の伊部南大窯東4号窯跡、大が池南窯跡、西の山窯跡、医王山東麓窯跡群2号窯（坊が谷窯跡）、大明神窯跡、片口団地窯跡（古）、若林山窯跡、瀬戸谷2号窯跡（福田越2号窯跡）、稲荷山窯跡（二つ塚窯跡）、大内東山窯跡、ホーロク岩西谷窯跡とこの時期の確認例は多い。

この内に発掘調査が行われたのは、幡多廃寺（出宮ほか1975）、万富東大寺瓦窯跡（岡本1980、岡本芳ほか2003）、泉瓦窯跡（岡本1980）、伊部南大窯東4号窯跡（石井ほか2003）、医王山東麓窯跡群2号窯（石井・重根ほか2012）、勘定口窯跡（寒川2016）とわずかで、消滅した窯跡もみられる。

この時期は、備前国分寺の差し替え瓦を焼成したと思われる油杉窯跡群や、戦乱により焼失した東大寺の再建瓦窯など寺院の修築に伴う瓦窯が多くみられる。万富東大寺瓦窯跡などは瓦専業窯であるが、多くは邑久古窯跡群や磐梨古窯跡群などの須恵器窯で瓦が生産されている。熊山山塊や伊部に分布する大明神窯跡など初期の備前焼窯では、瓦が焼成されている窯が多く熊山山上寺院との関わりが指摘されている（間壁1966）。

なお、備中の初期の亀山焼は瓦陶兼業窯のようであり（岡田1988）、中部地方の初期中世越前窯では12世紀代になって従来の須恵器窯で瓦生産が行われている。この時期に地方寺院の建設が盛んになるのには鳥羽院政期の寺院造営事業など政治的な背景が考えられている（柴垣1983）。

① 幡多廃寺の瓦窯 [図4]

幡多廃寺は、旭川東岸平野の微高地上の岡山市中区赤田に位置する。岡山県下最大の花崗岩製塔心礎があり、その小土壇が幡多廃寺塔跡として国指定史跡となっている。

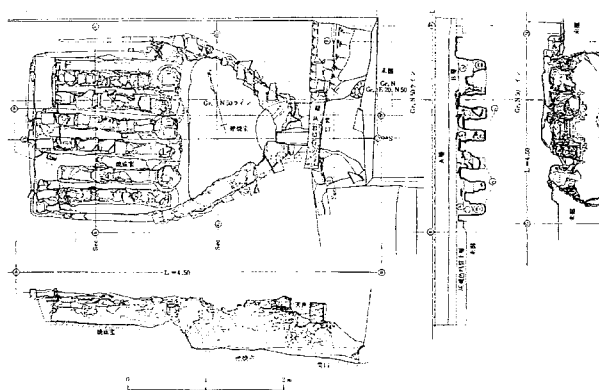


図4 幡多廃寺の瓦窯

る。律令期は上道郡幡多郷に属し、北方約500mに備前国府があったと考えられている。造営氏族は上道氏と考えられている。

1972年から1973年にかけて発掘調査され、壇上積基壇と思われる塔、金堂や講堂に想定される建物を確認されている。白鳳時代後半に創建され、奈良時代中頃には平城宮6225系軒丸瓦、6663系軒平瓦を導入し、平安時代中頃まで存続していたと考えられている。

創建時のものは不明であるが、寺域の北東部の東面回廊基壇部とその南側で、規模や構造が同様である2基の平安時代後期の瓦窯が確認されている。ほぼ完掘されたENIT瓦窯は、有牀式平窯で、全長約4m、約2m四方の焼成室をもつ。焼成室内には6条の分焰牀があり、焼成室と燃焼室との境である分焰牀の先端部には3か所の分焰柱が設けられている。燃焼室は、焼成室から一段低くつくられ二等辺三角形の平面形を呈し、その頂点に焚口がある。壁や分焰牀は平瓦を積み重ねてつくられ、粘土で上塗りされている。この瓦窯の窯材として使用された瓦は幡多廃寺に使用された瓦であり、大菱叩目文の平瓦が焼成されている。

② 伊部南大窯東4号窯跡

伊部南大窯東4号窯跡は、国史跡「伊部南大窯跡」周辺での公園開発に伴う窯の破壊を発端に、2000年の発掘調査で発見された窯跡である。進入路造成による厚い盛土のために不明な部分が多いが、南北方向に主軸をもつ全長10m未満の窖窯と推定している。瓦陶兼業窯で、服部廃寺の講堂再建瓦と同範と思われる軒丸瓦、大が池南窯跡と同型式の軒平瓦が出土しており、平安時代末の窯と考えられる。

③ 医王山東麓窯跡群2号窯（坊が谷窯跡） [図5]

医王山東麓窯跡群2号窯（坊が谷窯跡）は、国史跡「伊部西大窯跡」から北約50mに所在する。「伊部西大窯

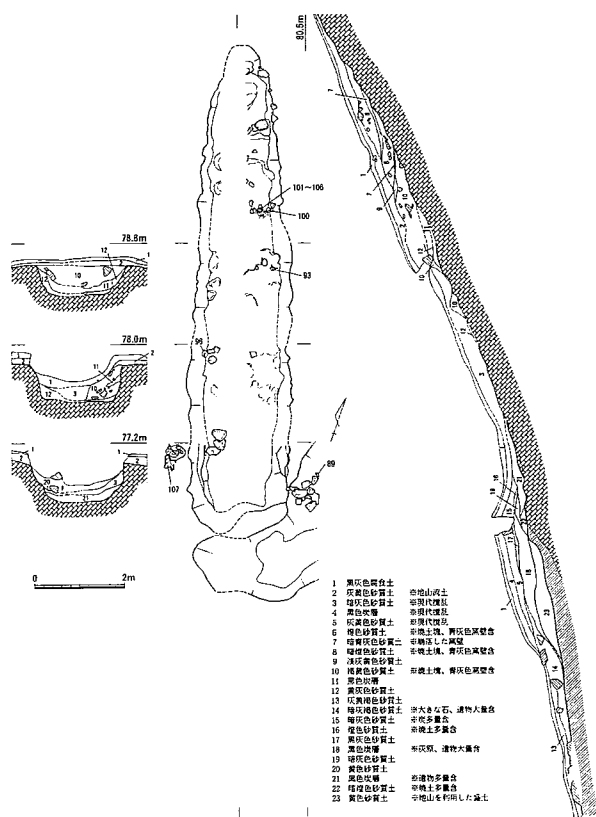


図5 医王山東麓窯跡群2号窯

跡」の周辺状況の窯を把握する一環として2011年に発掘調査が行われた。これまで、坊が谷窯跡として知られてきた窯である。窯は、長さ約11m、幅約2m、床面傾斜角約22度の半地下式窖窯である。瓦陶兼業窯で、平安時代後半から鎌倉時代初期の操業とみられる。また、平安時代末に焼成された平城宮6663系軒平瓦は、香登廃寺に供給されていたと考えられている（松尾2013）。

香登廃寺は、吉井川東岸の大内山東裾の扇状地上に位置する。備前市大内にあることから大内廃寺とも呼ばれる。北方には熊山があり、頂部に奈良時代後半頃の仏塔と考えられる国史跡の熊山遺跡がある。一帯には、熊山遺跡と同様の石積遺構が多数確認されている。律令期には、和気郡香登郷に属していた。平城宮6225系軒丸瓦と平城宮6664系軒平瓦、平城宮や難波宮などで使用されている重圈文軒平瓦などを使用して8世紀中頃に創建されている。また、備前国分寺創建瓦と同範の単弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、香登廃寺と備前国分寺との関わりが指摘されている（亀田2011）。造営主体は、渡来系氏族の香登臣一族であると考えられている。大が池南窯跡の瓦が香登廃寺で採集されている（田代1988）。

④ 泉瓦窯跡 【図6】

泉瓦窯跡は、吉井川支流の金剛川と日笠川との合流点

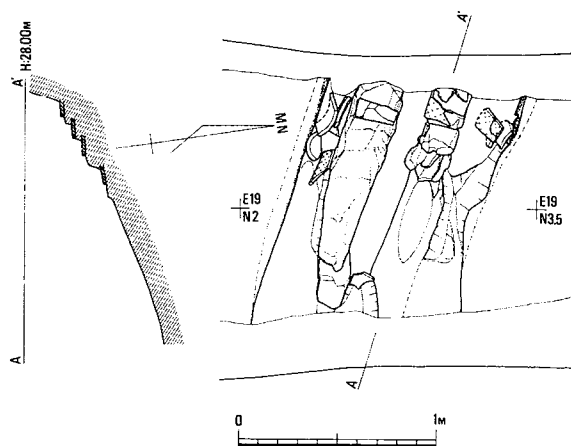


図6 泉瓦窯跡1号窯

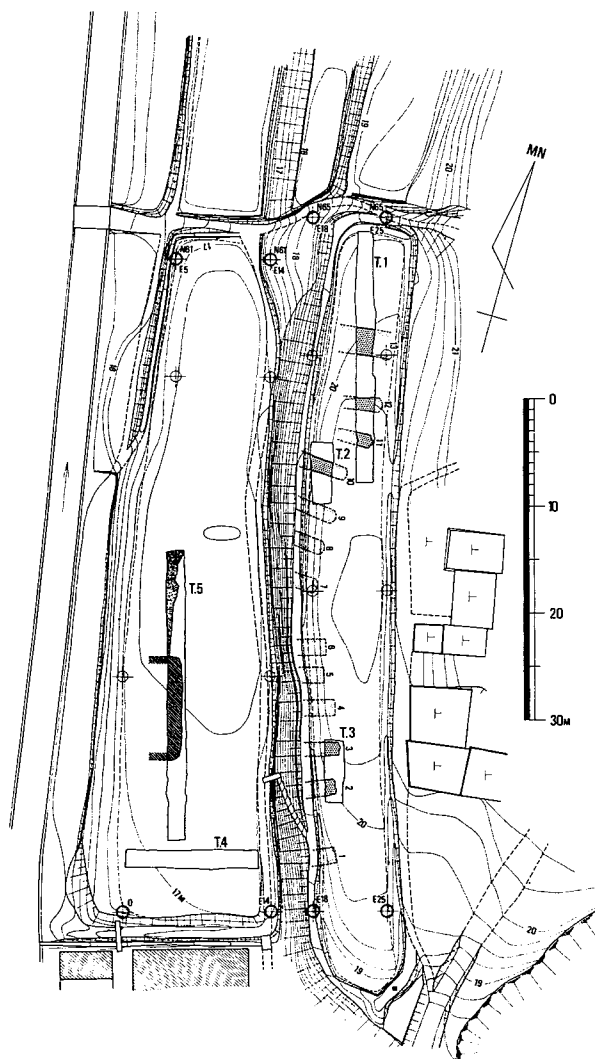


図7 万富東大寺瓦窯跡遺構配置図
昭和54年（1979）調査時

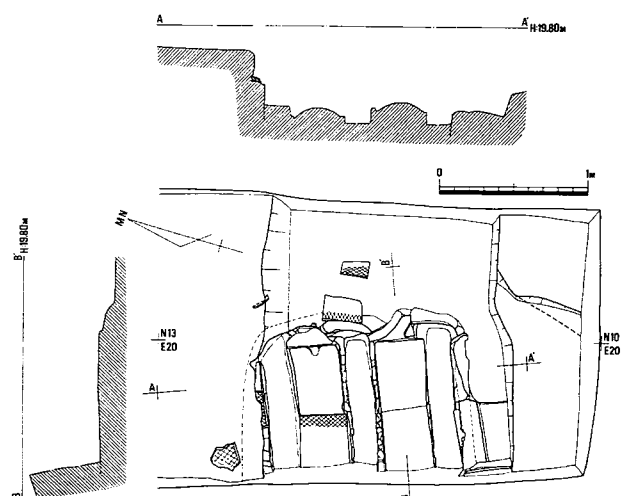


図8 万富東大寺瓦窯跡2号窯

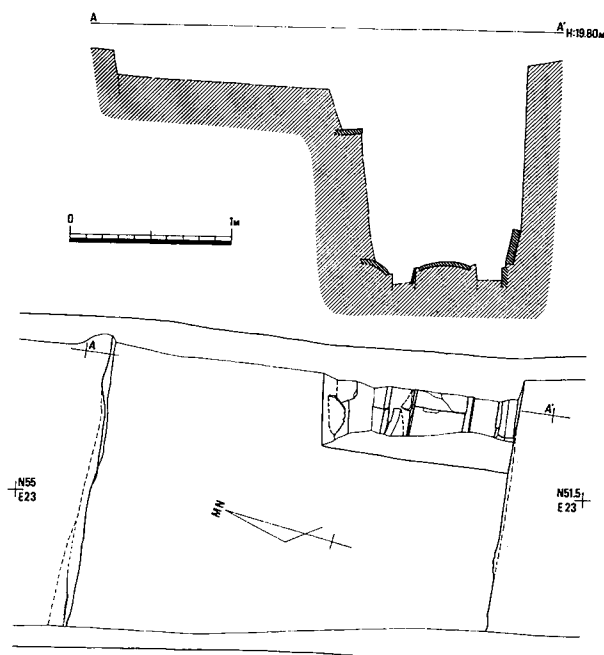


図9 万富東大寺瓦窯跡13号窯

の平野西端部、和気町泉の安養寺に隣接した低丘陵裾に所在する。2基の半地下式窖窯であるが、2条の分焰牀を備える特異な構造をもっている。この特殊な構造は、従来の窖窯で瓦を焼成するという必要性からではないかと考えられている。備前・備中・美作の中ではこのみであり、香川県に、ますえ畑瓦窯跡（11～12世紀）があるが、全国的にも少ない。瓦専業窯で、焼成された軒平瓦が備前国分寺で出土している。また、万富東大寺瓦窯跡出土瓦との製作手法上の類似が指摘され、年代は平安時代末から鎌倉時代初期頃と考えられている。

⑤ 万富東大寺瓦窯跡（国史跡）〔図7～12〕

万富東大寺瓦窯跡（国史跡）は、鎌倉期の東大寺再建瓦を製造した窯跡で、岡山市東区瀬戸町万富に所在する。JR万富駅の北方約400mにある南北に細長い丘陵「大寺山」の西斜面、その南西の半独立丘陵「上の山」の北斜面に連続して窯が構築されており、磁気探査や発掘調査によって14基の瓦窯が確認されている。

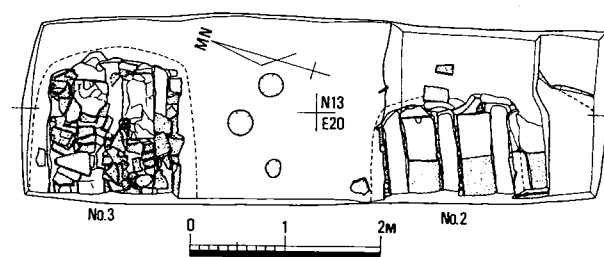


図10 万富東大寺瓦窯跡第3トレンチ実測図

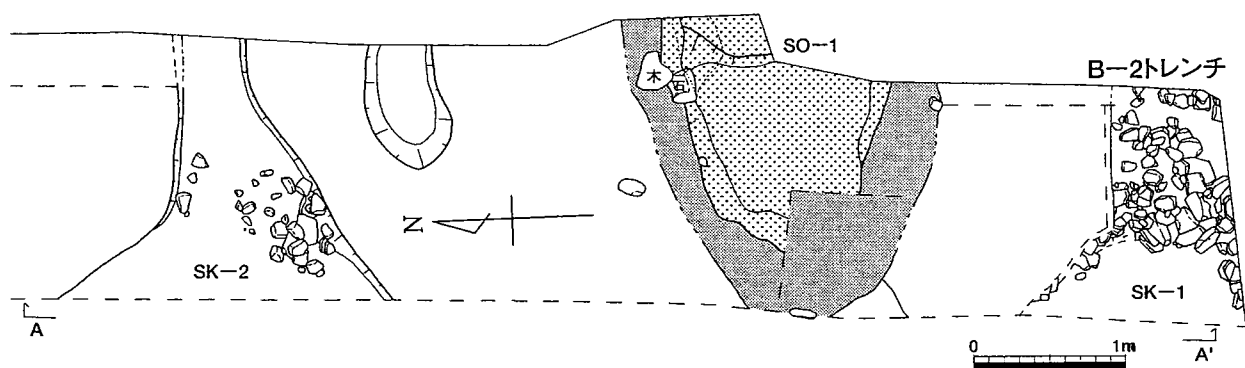


図11 万富東大寺瓦窯跡 SO-1 瓦窯と周溝（SK-1・SK-2）

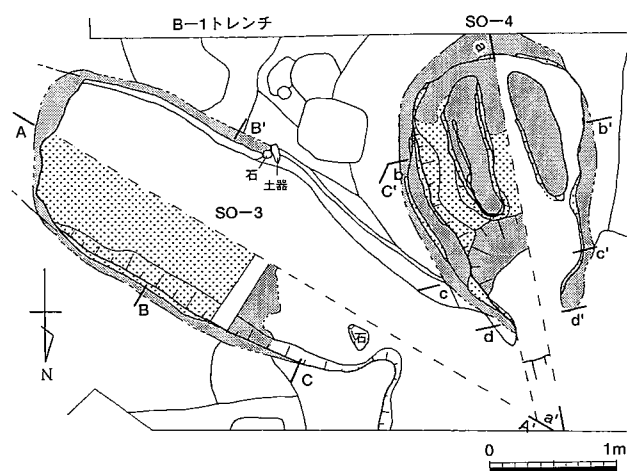


図12 万富東大寺瓦窯跡の土器窯

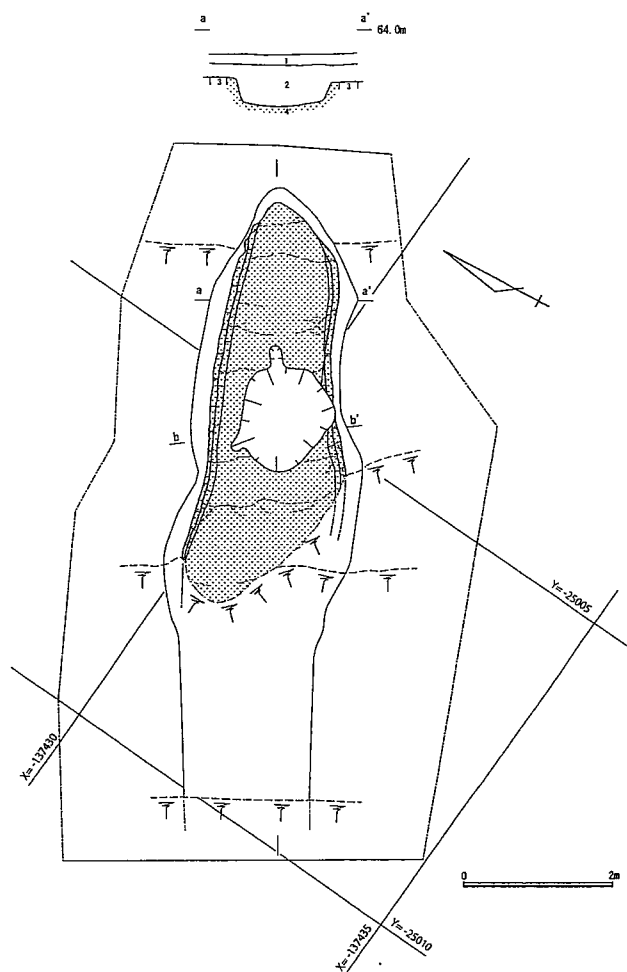


図13 勘定口2号窯

瓦窯は、分焰牀を持つ半地下式平窯で、2つの規模の窯がみられる。焼成室の長さ約2.3m、幅約1.2～1.3mのものと、焼成室の幅2.5mのものである。分焰牀は2条で、瓦と粘土を交互に積み上げて上面は瓦で構築される。分焰牀の幅は35～37cm、分焰道の幅は15～20cmである。窯と窯の間には、排水溝と思われる溝（図11）や屋蓋施設の痕跡と思われる柱穴（図10）などがみられる。遺構配置や叩目文様などから、窯は5・6基でまとまるようであり、大規模に組織的に瓦製作が行われていたものと考えられる。製造された瓦は、大仏殿のみではなく中門や回廊、南大門、鐘楼にも使用されており、30～40万枚の瓦が製造されたといわれる。

⑥ 勘定口窯跡（勘定口2号窯）〔図13〕

勘定口窯跡（勘定口2号窯）は、岡山市東区瀬戸町塩納の妙見山（大森山）の山裾に所在する。2基が存在していたようであるが、美作岡山道路改築に伴い1基が発見され、2号窯として緊急調査が行われた。窯体下部はなく、残存長約10m、最大幅約2m、焼成部床面傾斜角約32度の南西方向に焚口をもつ窖窯である。瓦が主体で古い様相の備前焼が出土しており、窯の時期は12世紀から13世紀の年代幅としている。東方約2kmに万富東大寺瓦窯跡があり、その関係性が興味深い。また、東に隣接して勘定口古墳群があり、周辺には未確認の古墳や窯の存在が想定される。

（3）室町時代以降の瓦窯

室町時代以降の瓦窯は、備前市の不老山東口窯跡と閑谷焼窯跡、岡山市の清水廃寺の瓦窯と確認されているものは少ない。不老山東口窯跡（河本1972）と清水廃寺の瓦窯（高橋2005）が発掘調査されている。

16世紀以降の瓦窯は、瓦窯構造の簡素化・省力化のためか地上式平窯が主流となるようである。その後、発達した形態の「達磨窯」は20世紀中頃の昭和30～40年代まで使用された。地上式平窯は、構造から遺構の痕跡が残りにくいため、この時期の瓦窯の確認例は少ないものと考えられる。

地上式平窯の調査例は、備前では万富東大寺瓦窯跡の土器窯2基（図12：岡本芳2003）があるのみで、瓦窯では、大阪府貝塚市の平安時代後期の地上式平窯7基（三浦2001）、豊臣氏大坂城の築城に伴う瓦を生産した達磨窯9基（小倉ほか2003）などがあるが、全国的に確認例は少ない。

① 不老山東口窯跡〔図14〕

不老山東口窯跡は、不老山の東斜面に位置し国史跡「伊部北大窯跡」の北東にあたる。窯は、推定全長40mの長大な窖窯で、床面幅約2.5～3m、床面傾斜角約15

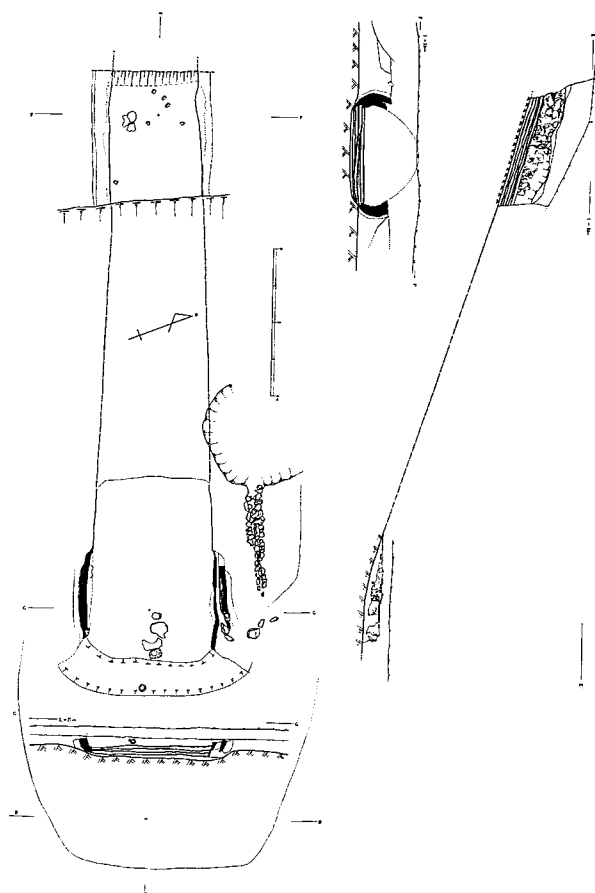


図14 不老山東口窯跡

度である。灰原から出土した分焰柱片は、窯の構造物であると考えられている。本窯跡の北には同規模の窯跡があり、これら2基の窯を囲む状態で溝と土塁が確認されている。2基の窯跡が一生産単位として操業されていたと考えられている。窯が巨大化して量産化を指向する室町時代に属するもので、その後このような形態の窯が16世紀後半に北大窯・西大窯・南大窯へ集約されると考えられている。

② 清水廃寺の瓦窯

清水廃寺は、吉備高原南端の標高100mから200mほどの谷間に位置する山上寺院である。古くから瓦の出土が知られ、堂や門、坊などの存在を想定させる小字名が残る。平安時代中頃の創建と考えられているが実態は不明である。2003年、本堂池の堤防改修工事に伴い、平瓦が積み重なった状態の焼成途中で放棄された瓦窯の焼成室部分が発見された。分焰牀を持つ半地下式平窯で、時期は概ね15世紀後半と推定されている。

③ 旧閑谷学校の瓦窯

閑谷焼窯跡は、1959年に岡山県史跡指定となった旧閑

谷学校の創建時の瓦を焼くために築かれた窯である。3基の窯があったようであるが、全長約10m、幅約3m、高さ約3mの連房式窖窯2基が残存している。瓦焼成後は、窯を再利用して祭器、茶器、細工物などの閑谷焼が焼かれた。

3. まとめ

(1) 寺院と瓦窯

備前の寺院と瓦窯の関係が判明（推定も含む）しているものは、奈良時代以前は、服部廃寺の生砂池窯跡・正伝名池窯跡・新池窯跡、須恵廃寺の奥池中池2号窯跡、賞田廃寺の瓦窯、富原北廃寺の上の段窯跡、藤野廃寺の飼葉瓦窯跡（漆谷池窯跡）、平安時代から鎌倉時代は、幡多廃寺の瓦窯、服部廃寺の講堂再建瓦生産地の伊部南大窯東4号窯跡、香登廃寺に供給された医王山東麓窯跡群2号窯（坊が谷窯跡）と大が池南窯跡、霊山寺跡の大明神窯跡（間壁1966）、備前国分寺の油杉窯跡群と泉瓦窯跡、奈良の東大寺の再建瓦を生産した万富東大寺瓦窯跡、室町時代の清水廃寺の瓦窯である。

東大寺再建瓦を生産した万富東大寺瓦窯跡、備前国分寺に瓦を供給した泉瓦窯跡と油杉窯跡群は、寺院までの距離が離れているが、それ以外は寺域内か少し離れたところに瓦窯がある。やや離れてある瓦窯のほとんどは須恵器窯跡群の中に築かれている。寺院造営の急激な増加による瓦供給過多を、従来の須恵器窯による瓦生産で補ったのであろうか。

(2) 瓦窯導入期の瓦窯

寺院創建時の瓦窯は、白鳳時代創建の服部廃寺の生砂池窯跡のみである。生砂池窯跡は、服部廃寺から約2.6kmとやや離れているが、隣接する正伝名池窯跡と新池窯跡と群をなして須恵器窯跡群とは別に服部廃寺の瓦供給のために構築された窖窯である（湊・亀田2006）。

この時期の須恵器窯跡群は、瀬戸内市牛窓の寒風窯跡群を含めて瀬戸内市邑久町尻海・福谷、瀬戸内市長船町東須恵や備前市南部の佐山・亀井戸に展開しており、服部廃寺からはやや離れている。そこで、近くに須恵器窯群の技術を利用して瓦窯を構築したのであろう。窯の構造の詳細はわかっていないが、おそらく無階窖窯であったと思われる。邑久古窯跡群の発掘調査された須恵器窯の構造は、いずれも斜面部に築かれた（無階）窖窯である（亀田2006）。

備前での瓦窯導入期は、古来からの須恵器窯の技術を利用した無階窖窯であったようである。なお、備中での瓦窯導入期の窯は、構造は不明であるが7世紀前半の末ノ奥古窯跡（西川1986、松尾2015）である。

(3) 瓦窯の構造変遷

備前・備中・美作の古代寺院では、平城宮6225・6663系の瓦が多く出土している。賞田廃寺の瓦窯は、平城宮6225・6663系の瓦が焼成されている（出宮ほか1971）。須恵廃寺には平城宮6663系軒平瓦が出土しており、同時期の須恵廃寺の瓦窯と思われる奥池中池2号窯跡で焼成された可能性が考えられる（湊・亀田2006）。藤野廃寺との関係性は不明であるが、北東約1.3kmにある飼葉瓦窯跡で平城宮6225系軒丸瓦を生産している（湊・亀田2006）。飼葉瓦窯跡の瓦は和気郡衙へ供給されたという指摘がある（出宮1989）。富原北廃寺には平城宮6663系軒平瓦が出土しており、その瓦窯と思われる上の段窯跡で焼成されたと考えられる（巖津1962, 伊藤1986, 湊・亀田2006）。

これら平城宮系の瓦の導入契機は、国分寺造営に伴うものと考えられているが、在地寺院に採用された後に維持・変容したものが国分寺を含む周辺諸寺へ拡散したもので、8世紀前半における地方寺院や官営施設の造営による造瓦需要の急激な増加に在地工人では対応しきれず、中央系（平城宮系）の文様や技術が採用されていく背景を示しているといわれる（梶原2005, 松尾2014）。

瓦専業窯の有階害窯の技術は、7世紀第3四半期の百濟滅亡に伴う亡命渡来人によってもたらされており（高橋2015）、有牀式平窯は、8世紀の国分寺造営に伴い全国的に普及していくようである（森1983など）。しかし、備前のこれらの窯は、須恵器窯の流れをくむ無階害窯である。須恵器や備前焼などの窯はこの形態であるため、不老山東口窯跡のように室町時代後半にもみられる。なお、備中では7世紀後半に瓦専業窯の無階有段害窯の構造である二子御堂奥1・2号窯跡が導入されている（葛原1974, 松尾2015）。

備前の瓦窯で有牀式平窯であるのは、平安時代後期の幡多廃寺の瓦窯、鎌倉時代初期の万富東大寺瓦窯跡と室町時代の清水廃寺の瓦窯である。有牀式平窯の初現が、備中では占見廃寺の山崎2号窯が8世紀（宗澤1951）、美作では榑原廃寺の瓦窯で奈良時代後半以降（伊藤・栗野1976）と8世紀代であるのに、備前では幡多廃寺の瓦窯の平安時代後期である。備前は、国府造営以前に賞田廃寺や幡多廃寺が造営されて国府がその地域に造営される。そして、離れて国分寺が造営されている。備中や美作では国府周辺に明確な古代寺院が確認されていない（湊・亀田2006）。備前だけ8世紀代の有牀式平窯がいまだ確認されていないとも考えられるが、このような備前での瓦窯先進技術の導入の遅れは、国府や国分寺の造営の社会的背景などが影響しているのかもしれない。

備前の有牀式平窯は、少なくとも平安時代後期には存在し、幡多廃寺の瓦窯は6条の分焰牀をもつ。国家的な大事業である東大寺再建瓦が生産された万富東大寺瓦窯

跡では、2条の分焰牀をもつ小型の有牀式平窯を多く築き大量の瓦の需要を賄っている。そして、室町時代までは、清水廃寺の瓦窯のように有牀式平窯を使用していたようである。

【図版出典】

- 図1 備前国の主な瓦窯 筆者作成
 図2 賞田廃寺の瓦窯（出宮ほか1971）より転載
 図3 佐山新池1号窯跡（亀田・白石ほか2014）より転載
 図4 幡多廃寺の瓦窯（出宮ほか1975）より転載
 図5 医王山東麓窯跡群2号窯（石井・重根ほか2012）より転載
 図6 泉瓦窯跡1号窯（岡本1980）より転載
 図7 万富東大寺瓦窯跡遺構配置図（岡本1980）より転載
 図8 万富東大寺瓦窯跡2号窯（岡本1980）より転載
 図9 万富東大寺瓦窯跡13号窯（岡本1980）より転載
 図10 万富東大寺瓦窯跡第3トレンチ実測図（岡本1980）より転載
 図11 万富東大寺瓦窯跡SO-1瓦窯と周溝（岡本芳ほか2003）より転載
 図12 万富東大寺瓦窯跡の土器窯（岡本芳ほか2003）より転載
 図13 勘定口2号窯（寒川2016）より転載
 図14 不老山東口窯跡（河本1972）より転載
 表1 備前の瓦窯 筆者作成

【引用・参考文献】

- 池田浩ほか1997『服部廃寺』長船町埋蔵文化財発掘調査報告2 長船町教育委員会
 池田浩1998「奥池中池一・二号窯跡」「服部廃寺」「生砂池窯跡」「新池窯跡」「正伝名池窯跡」「油杉窯跡群」『長船町史 史料編（上）』長船町
 石井啓ほか2003『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ』備前市埋蔵文化財調査報告5 備前市教育委員会
 石井啓・重根弘和ほか2012『医王山東麓窯跡群発掘調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告9 備前市教育委員会
 石井啓・重根弘和2013『備前窯詳細分布調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告11備前市教育委員会
 伊藤晃・栗野克己1976『榑原廃寺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告13岡山県教育委員会
 伊藤晃1986「富原北廃寺・富原遺跡」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会
 伊藤晃1987「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館
 巖津政右衛門1962「第五編 奈良時代」『岡山市史 古代編』岡山市史編集委員会
 大川清1972『日本の古代瓦窯』雄山閣出版
 岡田博1988「亀山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69』岡山県教育委員会
 岡本寛久1980『泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告37 岡山県教育委員会
 岡本芳明ほか2003『史跡万富東大寺瓦窯跡確認調査報告』瀬戸町教育委員会
 小倉徹ほか2003「大坂城跡」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告

－2001・2002年度－』財団法人大阪市文化財協会
 梶原義実2005「山陽道・山陰道における平城宮系瓦の展開」『考古学研究』第52－1
 亀田修一1998「須恵廃寺」『長船町史 史料編（上）』長船町
 亀田修一2000「百済軒丸瓦の製作技法」『古代瓦研究Ⅰ』奈良文化財研究所
 亀田修一2001「朝鮮半島との交流」「古代長船の須恵器作り」「古代仏教のひろがり」『長船町史 通史編』長船町
 亀田修一2006「邑久古窯跡群概説」『邑久町史 考古編』瀬戸内市
 亀田修一2011「備前国分寺跡と香登廃寺の同范瓦」『古文化談叢第65集（3）』九州古文化研究会
 亀田修一・白石純ほか2014『備前邑久窯跡群の研究』岡山理科大学考古学研究室
 寒川史也2016「勘定口窯跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報15』岡山市教育委員会（2016. 3月刊行予定）
 葛原克人1974「二子御堂奥古窯跡群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2』岡山県教育委員会
 河本清1972「不老山東口古備前窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告1』岡山県教育委員会
 柴垣勇夫1983「中部地方の瓦窯」『佛教藝術148』毎日新聞社
 高橋伸二2005「清水廃寺」『岡山市埋蔵文化財センター年報4』岡山市教育委員会
 高橋文英2015「日本における有階窖窯の出現とその系譜」『窯跡研究 第3号』窯跡研究会
 田代健二1988「備前市内採集の遺物について」『古代吉備』第10集
 出宮徳尚ほか1971『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会
 出宮徳尚ほか1975『幡多廃寺発掘調査報告書』岡山市教育委員会
 出宮徳尚1989「和気氏氏寺の予察的小考」『古代吉備』第11集 古

代吉備研究会
 中野雅美2006「福谷湯通窯跡」『邑久町史 考古編』瀬戸内市
 西川宏1986「末の奥窯跡群」『岡山県史 考古資料』岡山県史編集委員会
 間壁忠彦・間壁霞子1966・1966・1968・1984「備前焼研究ノート（1）～（4）」『倉敷考古館研究集報1・2・5・18』
 松尾佳子2013「岡山県の重圏文系軒瓦」『第13回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅡ』発表要旨 奈良文化財研究所
 松尾佳子2014「備中における平城宮系軒瓦の導入と展開」『天理大学考古学・民俗学研究室紀要18』天理大学考古学研究室
 松尾佳子2015「備中の瓦窯」『瓦窯の構造研究5 瀬戸内地域の様相』窯跡研究会第13回研究報告資料
 三浦基2001『加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要10』貝塚市埋蔵文化財調査報告59 貝塚市教育委員会
 湊哲夫・亀田修一2006『吉備の古代寺院』吉備考古ライブラリー13 吉備人出版
 宗澤節雄1951「浅口郡金光町占見瓦窯跡発見報告」『吉備考古』81・82合併号
 毛利光俊彦1983「近畿地方の瓦窯」『佛教藝術148』毎日新聞社
 森郁夫1983「古代の瓦窯」『佛教藝術148』毎日新聞社
 矢部秋夫1985「中世」『瀬戸町誌』瀬戸町
 『備前市の文化財』備前市教育委員会1987
 『改訂 岡山県遺跡地図 東備地区・岡山地区』岡山県教育委員会2003

【連絡著者：岡本芳明 〒703-8284 岡山市中区網浜834-1
 岡山市埋蔵文化財センター
 E-mail: yoshiaki_okamoto@city.okayama.jp】

表1 備前の瓦窯

名 称	所在地		郡	形 態		主な遺物	主な供給先	時 代	文 献 等	
勘定口窯跡 (勘定口2号窯)	瀬戸町	塩納	磐梨郡	瓦陶兼？	窖窯	瓦・備前焼		平安～鎌倉	発掘	寒川2016、矢部1985 岡山県遺跡地図東備
大谷窯跡	瀬戸町	鍛冶屋	磐梨郡	瓦陶兼		須恵器・瓦		平安～鎌倉	消滅	矢部1985 岡山県遺跡地図東備
五反田窯跡	瀬戸町	南方	磐梨郡	瓦専業？		瓦		平安～鎌倉		岡山県遺跡地図東備
万富東大寺瓦窯跡	瀬戸町	万富	磐梨郡	瓦専業	平窯	瓦		鎌倉	発掘	岡本1980、岡本芳2003
妙見山下窯跡	瀬戸町	塩納	磐梨郡	瓦専業？		瓦		鎌倉		矢部1985
ばかりし窯跡	瀬戸町	宗堂	磐梨郡	瓦陶兼？		須恵器・瓦		鎌倉		岡山県遺跡地図東備
寺山窯跡	瀬戸町	南方	磐梨郡	瓦専業？		瓦		鎌倉		矢部1985 岡山県遺跡地図東備
湯の奥窯跡 (徳王寺窯跡)	瀬戸町	肩脊	磐梨郡	瓦専業？		瓦		鎌倉		矢部1985
上の段窯跡 (富原瓦窯跡)	岡山市	津高	津高郡	瓦専業	窖窯	瓦	富原北廃寺？	奈良		巖津1962、湊・亀田2006 岡山県遺跡地図岡山
貫田廃寺の窯跡	岡山市	貫田	上道郡	瓦陶兼	窖窯	瓦・須恵器	貫田廃寺	奈良	発掘	出宮ほか1971 岡山県遺跡地図岡山
幡多廃寺の瓦窯	岡山市	赤田	上道郡	瓦専業	平窯	瓦	幡多廃寺？	平安	発掘	出宮ほか1975 岡山県遺跡地図岡山
清水廃寺	岡山市	芳賀	津高郡	瓦専業	平窯	瓦	清水廃寺	室町	発掘	高橋2005
飼菜瓦窯跡 (漆谷池窯跡)	和気町	吉田	和気郡	瓦専業	窖窯	瓦	藤野廃寺？	奈良～平安		湊・亀田2006、出宮1989、岡本1980 岡山県遺跡地図東備
田原下崎瓦窯跡	和気町	田原下	和気郡	瓦専業		瓦		平安	消滅？	岡本1980
泉瓦窯跡	和気町	泉	和気郡	瓦専業	窖窯	瓦	備前国分寺跡	平安～鎌倉	発掘	岡本1980 岡山県遺跡地図東備
福富窯跡	和気町	福富	和気郡	瓦専業				－		岡山県遺跡地図東備
生砂池窯跡 (産土池窯跡)	長船町	磯上	邑久郡	瓦専業？	窖窯？	瓦・埴・須恵器	服部廃寺創建時	奈良		池田1998 岡山県遺跡地図岡山
正伝名池窯跡	長船町	磯上	邑久郡	瓦専業？	窖窯？	瓦	服部廃寺創建時？	奈良		池田1998 岡山県遺跡地図岡山
奥池中池2号窯跡	長船町	西須恵	邑久郡	瓦専業？	窖窯？	瓦	須恵廃寺？	奈良		池田1998、湊・亀田2006、亀田2006
新池窯跡	長船町	磯上	邑久郡	瓦専業？	窖窯？	瓦・須恵器	服部廃寺？	奈良～平安		池田1998 岡山県遺跡地図岡山
油杉窯跡群 (高山3号窯跡？)	長船町	磯上	邑久郡	瓦陶兼	窖窯？	須恵器・瓦	備前国分寺差替瓦？	平安		池田1998、亀田2006 岡山県遺跡地図岡山
福谷湯通窯跡	邑久町	福谷	邑久郡	瓦陶兼	窖窯？	須恵器・瓦		平安		亀田2006 岡山県遺跡地図岡山
福谷奥田窯跡	邑久町	福谷	邑久郡	瓦陶兼	窖窯？	須恵器・瓦		平安		岡山県遺跡地図岡山
佐山新池窯跡（群）	備前市	佐山	和気郡	瓦陶兼？	窖窯	須恵器・瓦・瓦塔		奈良	発掘	亀田・白石ほか2014
伊部南大窯東4号窯跡	備前市	伊部	和気郡	瓦陶兼	窖窯	備前焼・瓦	服部廃寺講堂再建瓦？	平安	発掘	石井ほか2003、石井・重根2013 湊・亀田2006
大が池南窯跡	備前市	伊部	和気郡	瓦陶兼	窖窯	備前焼・瓦	香登廃寺？	平安		間壁1966、田代1988、石井ほか2003 石井・重根2013、岡山県遺跡地図東備
西の山窯跡	備前市	伊部	和気郡	瓦陶兼	窖窯	備前焼・瓦		平安		田代1988
医王山東麓窯跡群2号窯 (坊が谷窯跡)	備前市	伊部	和気郡	瓦陶兼	窖窯	備前焼・瓦	香登廃寺	平安～鎌倉	発掘	石井・重根ほか2012、石井・重根2013 間壁1966・1984、松尾2013
大明神窯跡	備前市	伊部	和気郡	瓦陶兼	窖窯	備前焼・瓦	霊山寺跡	平安～鎌倉		間壁1966
片口団地窯跡（古）	備前市	伊部	和気郡	瓦陶兼	窖窯？	備前焼・瓦		平安～鎌倉		石井・重根2013 岡山県遺跡地図東備
若林山窯跡	備前市	西片上	和気郡	瓦陶兼	窖窯？	備前焼・瓦		平安～鎌倉		岡山県遺跡地図東備
瀬戸谷2号窯跡 (福田越2号窯跡)	備前市	伊部	和気郡	瓦陶兼	窖窯？	備前焼・瓦		平安～鎌倉		間壁1966 岡山県遺跡地図東備
稲荷山窯跡 (二つ塚窯跡)	備前市	伊部	和気郡	瓦陶兼	窖窯	備前焼・瓦		平安～鎌倉		間壁1966、石井・重根1913 岡山県遺跡地図東備
大内東山窯跡	備前市	－	和気郡	瓦陶兼	窖窯	備前焼・瓦		平安～鎌倉		間壁1966
ホーロク岩西谷窯跡	備前市	伊部	和気郡	瓦陶兼	窖窯	備前焼・瓦		鎌倉		石井・重根2013 岡山県遺跡地図東備
不老山東口窯跡（群）	備前市	伊部	和気郡	瓦陶兼	窖窯	備前焼・瓦		室町	発掘	河本1972、間壁1966 岡山県遺跡地図東備
閑谷焼窯跡	備前市	閑谷	和気郡	瓦陶兼	窖窯	閑谷焼・瓦	閑谷学校	江戸		備前市の文化財 岡山県遺跡地図東備